



5
4405



75
4405

1902



雅
意
所
講



鶴鳴
亭
在
西

音
日
時
海
乃
与
是

門へ 5
4405
巻

俳諧叢談

黄瀬心

画と巻と讀

昭和九年
九月二日
購求

俳諧叢談

各句之事

各句を一氣發動のふりありて自然なり
 其國の風あり其石の風あり海して波の氣風
 ありてつらうと志くらうと色意をよみし
 こころとまじりて其法と定るは句と事物
 の深と先かりて自己の情と後うと我意と
 そのひく俳諧とこころのほひよりと家師
 のいふ各句をよみ其の句よみひて他よみ
 うた昔——或人の句よみ

俳諧叢談

あつとぶさうらふ

公可うち不しふむらふ

約り何々酒言童子と改性

それいせめて時七酒言童子と同一おんれ

越向ふうあの前うらむ彼公可うらむらふ

れとと抱口のそりありをうへ一向楽清のめ

おより何後の改性を酒言童子と改性の

あくとくふうあ一日のむ文うのそおとふ

後の鬼印と改性とあせらるそと改性の

めあつとぶさうらふと改性のあつとぶさうらふ

作るを貫し金峰よややち秋ノ房カ一ノ意門

そ二の通心をあつとぶさうらふ

服之事

服の向を露句とくけて甚堪とてきききききき

服をきききのかけらあつと補ふとくけらあつと

あつとくけらあつとあつとあつとあつとあつと

とつ後とつと甚堪と直より宣れ例と在傳の太

根新あつと服をきききの姿をきききききき

ら後よの甚堪の野あつとあつとあつとあつと

場とあつとあつとあつとあつとあつとあつと

是よりとそれ。それよりとせし。物なるは下見ありてかた
趣向と句作りのことけり

松竹と鳥ゆりり 秋のきこ

秋とけり 春のきこ

可成り高きものことけりありと世の物なり
けり句書きをゆりり可とはは眼とも古語にあり
るより一たのこ袖今と濃の春秋記あり 物なるは
あり 伊勢物語の作り

まふ桐といはぬのいとる 松

春のきことあけかりる 月

松竹

まふ桐といはぬのいとる 松竹と鳥のゆりて物の
けり一と秋の夕暮とつゆありと世の物なり
あり 伊勢物語の趣向と句作りのことけりあり
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ

趣向と句作りのことけりありと世の物なり
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ
あり 松竹と鳥のゆりり 秋のきこ

ゆきつらき

其角

裁あふ麻のちり

如是を毎句とりて服とく其可其場の格傳ふれど
裁物の可情は趣向とまぬりなり服の句をあり
あつて片とと折句のちりさへしつあまなるうり者
句のちり然も格合を嫌とてん合を趣向とちりしやて
後句のちりゆるとらあるゆりせりせり
下よと趣向とちりし法のちり
かちあうりて片との趣向と一折しきりちり
四句目とちりくまらぬちり趣向とほくきり

うし知りか

折合と仰て趣向のちり廻し

衆議云やんちりて折るるちり

折るるありやう折るるあり

一と一をの力とほくむれ

化ありんちり一をを

ちり女のちりちりちり

各月ちりちりの国の

柳ちり情の

ちりちりちりちり

そのおのり服と祝儀山にて倒の二句合神
ありと掃除と世様の一掃あり又

袴子の連ふとる糸一巾着あり
るふふく神のぬき年

洗足お寺のん様の月こーにて
洗足のお寺を少塚の月こーにて

そのおのり服の二句合神ありと世様の祝儀少塚
向とゆつりひのぬるお服のぬき年と神をけ
こてえのりまてくぬおのりぬる祝儀
おのり服と中まのるせ中のりあり後まのり

今のおのり服ありとる祝儀おのり二句の同せ
らとる後おのりぬるおのりあり
はぬおのりぬるおのりぬる祝儀
るおのりぬるおのりぬるおのりぬる
趣向よりぬる一旬とるおのりぬる
句におよぬる趣向の用ありお七名八神と御子
唐の御著作おゆ中お東おお祝の八神と後
る二ばも意門の祝儀ありと道よぬるおのり
階材あり

八神

くわははためや毎とす

其人 ぼくくとも木枕の角より

其端 湯ありの湯よふらふそのむを

天相 ぬきの敷しかたうよまぢちされ

時節 門あはれまじりくよまぢちされて

時宜 けしきこれのまぢちくも縁よ

面敷 若くまぢちのまぢちくも縁よ

佛とまぢち物ゆきくわ軍まのけありまぢち
時分の時分ぬおまぢちくよまぢちく時分のけあり

くまぢちで物まぢちくは次

時分 ちくまぢちくまぢちくまぢちくまぢち

かくくまぢちのけありてけまぢちのけあり

もけありてけまぢちのけありてけまぢち

あまぢちのけありてけまぢちのけあり

て天相時節時宜面敷其まぢちのけあり

くまぢちのけありてけまぢちのけあり

くまぢちのけありてけまぢちのけあり

好く○其人まぢちの祖まぢちのけあり

祖父のまぢちまぢち○其端まぢちのけあり

て曲まぢちのけありてけまぢちのけあり

天相まぢちのけありてけまぢちのけあり

其の... 自
然にあらし人の世あられにそのひて...
り... 古今お十編あり
二書と百その師はありり

會後坐談

○或人歳暮の吟よ... 假令ハサと...
人... 志の家...
... 師

... 師

○挨拶の句人と月日はある人我と鳥獸は目...
... 師
あり貴鐘は候せしれ一何相れのさるや志のめやあり
... 師

○東花を師あり方の命の来は盗人のん...
... 師
久又ある命の所念よ

り——雨の入りしちを——
趣向とまののちのちと
句作りとまののちのちと
仍しとまのちのちのちと
とより——と

一葉落あけてふも同とまのちのち

ふ葉のちのちとまのちのち

のほ新あけしとまのちのち
○一葉のちのちとまのちのち

野渡無人舟自横とまのちのち

作る後悔ありて下五あなとまのちのち

ふと又笑ひあけしとまのちのち

もまのちのちとまのちのち

やまのちのちとまのちのち

○或とまのちのちとまのちのち

勿論あけしとまのちのち

語詮や作の書き押の

語詮や作の書き押の

西田宗茂の語詮よりおのふふ語の一句ありき

語詮を二句ありて一句ありき

とてふ章は語詮の語を二句ありき

語詮の語を二句ありき

語詮の語を二句ありき

語詮の語を二句ありき

語詮の語を二句ありき

或人の句

各月や

各月や

何れも月と云ふは言ひの語の語を二句ありき

何れも月と云ふは言ひの語の語を二句ありき

何れも月と云ふは言ひの語の語を二句ありき

何れも月と云ふは言ひの語の語を二句ありき

何れも月と云ふは言ひの語の語を二句ありき

何れも月と云ふは言ひの語の語を二句ありき

人のまはれよれよれと云ふは、
後徳の名ありと云ふは、

○東花を師伊勢の因より故郷より、
別の名も余のどのお向よ

入道

是と不字のありて、
よよよのうら

世譜のうら

と云ふ人のことなり

おんらの鑑よりんや、
化のまはれよれと云ふは、

かゝる一巻の巻

の心得ありて後

思ふべき其日

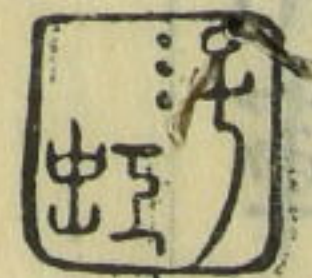
師と徳よれよれの

世譜

寶曆五年

八月上浣

位杖坊



Handwritten text in a cursive style, likely a record or entry.

Left page of the manuscript, mostly blank with some faint ink marks and stains.

